

2022. 6. 12 (日) 使徒2:5~13

2:5 さて、エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国々から来て住んでいたが、

2:6 この物音がしたため、大勢の人々が集まって来た。彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、呆気にとられてしまった。

2:7 彼らは驚き、不思議に思って言った。「見なさい。話しているこの人たちはみな、ガリラヤの人ではないか。

2:8 それなのに、私たちそれぞれが生まれた国のことばで話を聞くと、いったいどうしたことか。

2:9 私たちは、パルティア人、メディア人、エラム人、またメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントスとアジア、

2:10 フリュギアとパンフィリア、エジプト、クレネに近いリビア地方などに住む者、また滞在中のローマ人で、

2:11 ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレタ人とアラビア人もいる。それなのに、あの人たちが、私たちのことばで神の大きなみわざを語るのを聞くと、

2:12 人々はみな驚き当惑して、「いったい、これはどうしたことか」と言い合った。

2:13 だが、「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、嘲る者たちもいた。

#### <説教>

今からおよそ2000年前、エルサレムに集まり祈っていたイエスの使徒たち弟子たちの上にイエスの約束の聖霊が天から降り、一人ひとりの上にとどまりました。すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めました(2:4)。その結果どんなことが起こったか、それが5節以下に書かれています。

当時はユダヤ人の三大祭りの一つ〈五旬節〉(七週の祭り、刈り入れの祭り、初穂の日)の時でしたので(1)、〈エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国々から来て住んでい〉ました(5)。〈天下のあらゆる国々〉とは具体的には9~11節に書かれている範囲の〈国々〉のことです。それはエルサレムから見ると北東にある〈パルティア〉、〈メディア〉、〈エラム〉、〈メソポタミア〉、そしてエルサレムを含めた〈ユダヤ〉、そしてエルサレムの北西に位置する〈カパドキア、ポントスとアジア、フリュギアとパンフィリア〉、そして南西の〈エジプト、クレネに近いリビア地方〉、そして西の〈ローマ〉、そして引き返して地中海の島〈クレタ〉、そしてエルサレムの南方向の〈アラビア〉でした。それが当時大体「全世界」と一般的に考えられていた範囲でした。また〈敬虔なユダヤ人たち〉とは、より正確に言えば、文字通りの〈ユダヤ人〉とユダヤ教に改宗した外国人(欄外注)である〈改宗者〉のことでした。つまり、〈ナザレ人イエス〉(22)をキリストと信じるには至っていないけれども、少なくとも聖書(今で言う旧約聖書)の唯一真の神は信じ、キリストを待ち望んでいた人たちでした。当時エルサレムにいた、そんな〈大勢の人々〉が〈この物音がしたため〉に、それを聞いて〈集まって来〉ました(6)。ここで〈物音〉と訳されている言葉は普通(他の箇所では)「声」と訳されていますから、〈この物音〉とは〈激しい風が吹いて来たような響き〉(2)というよりも、むしろイエスの使徒た

ち弟子たちが〈御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた〉その「声」のことだと思われます。

さてその〈大勢の人々〉が聞いた「声」は〈それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話す〉「声」、つまり通訳なしでそれぞれ誰もが聞いてわかることばでした。その〈弟子たちが話〉したことは〈神の大きなみわざ〉でした。それは〈神はイエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました〉(24)、〈このイエスを神はよみがえらせました〉(32)ということだったに違いありません。こうして「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」(1:8)と言われたイエスのみことばが実現し始めました。このように聖霊はイエスのみことばを、神のみことばを人間のうちに、この地上に適用し、実現なさるのです。

しかしそのような聖霊の働き、力についてよく知らない〈大勢の人々〉は、イエスの弟子たちが神の大きなみわざを他国のいろいろなことばで語っていることに〈呆気にとられ〉(6)、〈驚き、不思議に思っ〉た(7)のでした。そして言いました。〈「見なさい。話しているこの人たちはみな、ガリラヤの人ではないか。それなのに、私たちそれぞれが生まれた国のことばで話を聞くと、いったいどうしたことか。」〉(7-8)。〈人々はみな驚き当惑して、「いったい、これはどうしたことか」と言い合った。〉(12)のです。弟子たちが話した〈他国のいろいろなことば〉にさえも〈ガリラヤの人〉特有の「なまり」のようなものがあつたのでしょうか。そこはよくわかりませんが、とにかく人々は弟子たちが〈ガリラヤの人〉であり〈無学な普通の人〉(4:13)なのに〈私たちそれぞれが生まれた国のことばで話を聞くと、いったいどうしたことか。〉(8)、〈あの人たちが、私たちのことばで神の大きなみわざを語るのを聞くと、〉(11)と〈人々はみな驚き当惑して、「いったい、これはどうしたことか」と言い合った。〉(12)のでした。

それはひとえに人々が聖霊の働きを、聖霊の力をまだまだよく知らなかったからだと言えるでしょう。〈敬虔なユダヤ人〉なら唯お一人の神のことを知っており、また聖霊のことも少なくともその存在は知っており、信じてもいたと思いますが、それでもまだ正しく、よくは知っていなかったのです。それでも「いったい、これはどうしたことか」驚いているならまだ良い方だったと言えるかもしれません。なぜなら〈「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、嘲る者たちもいた。〉からです。もっともそれもまたイエスの弟子たちに働いて〈他国のいろいろなことばで〉〈神の大きなみわざを語る〉ようにさせた聖霊の驚くべき大きな力の故だと言うことができると思います。聖霊なる神の力か、さもなければ酒の力か、ということになるのでしょうか。後に使徒パウロは「ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌いなさい。」(エペソ 5:18-19)と言いました。「酔う」とはつまりその考えや行動が支配されることですから、このときのイエスの弟子たちは聖霊に支配されていたのであり、〈聖霊に満たされ〉て、〈御霊が語らせるままに〉語ったのです(4)。彼らは確かに聖霊に「酔って」いたのでした。

創世記の昔、〈全地は一つの話しことば、一つの共通のことば〉であり、その人々が高慢にも〈町と頂が天に届く塔を建てて、名を上げよう〉とした(要するに神のようになら

うとした) ときに神は〈彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないように〉して〈人々を地の全面に散らされ〉、町と塔の建設をやめさせなさいました(創世記 11 章)。ペンテコステの日の出来事はその「バベルののろい」の回復だとも言われています。つまり、今や国々のことばはそれぞれ違うままに、しかしそれぞれのことばで同じ〈**神の大きなみわざ**〉が語られ、イエスの復活が証言され、そのイエスの名のもとに人々が集められるようになったのです。今や聖霊の力によってバベルの塔ではなく、キリストの教会を建てるために人々が集められるようになったのです。

聖霊は〈**ガリラヤの人**〉だった弟子たち〈**みな**〉の〈一人ひとりの上にとどまった〉)のでした。それは彼らに「語学力」を与えたということではありません。確かに一時的にはここに書かれている民族や国の多くのことばを話したかもしれませんが。しかし大事なことは、そのことばによって、彼らはイエスの復活の証人、キリストの証人として〈**神の大きなみわざを語**〉ったということです。要するに福音をきちんと正しく語ったということです。聖霊は彼らに「福音を正しく語る力」「イエスの復活の証人としての力」「キリストの証人としての力」をお与えになったのです。

私たちがまた一人ひとりが、同じ永遠に変わる事のない聖霊を豊に与えていただいて、聖霊に満たされて、聖霊の力によってキリストの教会としてキリストのもとに集まり、福音を正しく語り、またそれに相応しい行いをもってキリストの証人として歩んでいきたいと心から願います。

